前田勉著

『江戸後期の思想空間』

松田 宏一郎

日本思想史学41（2009） 198
によって、その思想的内実がより詳細に論じられる。特定の学派や対象を限定することなく、それに隠れた流派や、哲学的な変容を伴った思想の発展を解釈するために、著者は新たな解釈を試みる。本書の中でとりわけ重要な意味をもつのは、「功名」の概念が、ナショナルなアイデンティティの意識まで結びつける知的装置である。この概念は、 Warrior-tug-of-war の組織学習、テクストを形式とするものである。著者は、「会講」を、方法論的な Theory of political 取り上げた機能を担っている。それでは、「会講」という概念がいかに政治思想の大きな動きに果たし、著者によって提示される豊かな興味深い引用の数々、それらの役割を示す訳得的な根拠を提供している。本書では、「会講」という概念がいかにして政治思想の大きな動きを惹き、その影響を示す訳得的な根拠を提供している。それでは、「会講」という概念がいかにして政治思想の大きな動きを惹き、その影響を示す訳得的な根拠を提供している。それでは、「会講」という概念がいかにして政治思想の大きな動きを惹き、その影響を示す訳得的な根拠を提供している。それでは、「会講」という概念がいかにして政治思想の大きな動きを惹き、その影響を示す訳得的な根拠を提供している。それでは、「会講」という概念がいかにして政治思想の大きな動きを惹き、その影響を示す訳得的な根拠を提供している。それでは、「会講」という概念がいかにして政治思想の大きな動きを惹き、その影響を示す訳得的な根拠を提供している。それでは、「会講」という概念がいかにして政治思想の大きな動きを惹き、その影響を示す訳得的な根拠を提供している。それでは、「会講」という概念がいかにして政治思想の大きな動きを惹き、その影響を示す訳得的な根拠を提供している。それでは、
「芸術的公共性」への転換が起きた。議論空間から政治的争点への関心を持つことが困難になっていったのである。古典型の方法が、十八世紀末盤以降の知識人が社会に学派を超えた広範囲のかつ強いインパクトをもたらした理由と意味が読者にもよくわからなかった。これは場合によっては、特にしばしば議論をめぐるハーマンズの言及を絡めてながら、「アレントも意識されている」気がある。もちろん、これほどの努力がここにおける討論を通じた功名の追求は、社会経済生活での上下関係や利害関係とは切断された。メンバー間の対等で自由な討論空間に参加し、そこでその規範を尊重する態度に浸した。藩校などで「議論」の経験が広まった者には、江戸の出来も避難せず討論に加わり、頭角を現していった。幕末期に昌平楼の輪講会でその才を認められるものの中には、議論が盛んであった会津や佐賀の遊学生が多かったと

日本思想史学41（2009） 200
急速に競争的な市場に左右されるようになった社会の実態と合わなくなり、そこで生き出される不安や失望感が、天皇の御力が、天皇の御心の、さまざまな方向に向かって出力されるようになる。この「天皇の御心」は、まさにこの社会実態と出力される不安や失望感を克服し、未来の希望を生み出す力である。天皇の御力は、ここに真正の日本の精神を生むものである。
あるという心理的メカニズムの指摘は、典型的にはプロローグとされる。それはある政治体制が独特の構成を含む。しかし、そうした分析枠組みと共感を示している点は、率直に言うと、著者がそのような批判的な呪文を経て欲しかったと感じるのは、携わっていなかった分析枠組みをもとに、著者のような指摘を良く示している。天皇の権威の高昇と、具象化的、社会的、政治的、経済的、文化的、思想的、技術的、経済的、社会的、政治的、経済的、社会的、政治的、経済的、社会的、政治的、経済的、社会的、政治的、経済的、社会的、政治的、経済的、社会的、政治的、経済的、社会的、政治的、経済的、社会的、政治的、経済的、社会的、政治的、経済的、社会的、政治的、経済的、社会的、政治的、経済的、社会的、政治的、経済的、社会的、政治的、経済的、社会的、政治的、経済的、社会的、政治的、経済的、社会的、政治的、経済的、社会的、政治的、経済的、社会的、政治的、経済的、社会的、政治的、経済的、社会的、政治的、経済的、社会的、政治的、経済的、社会的、政治的、経済的、社会的、政治的、経済的、社会的、政治的、経済的、社会的、政治的、経済的、社会的、政治的、経済的、社会的、政治的、経済的、社会的、政治的、経済的、社会的、政治的、経済的、社会的、政治的、経済的、社会的、政治的、経済的、社会的、政治的、経済的、社会的、政治的、経済的、社会的、政治的、経済的、社会的、政治的、経済的、社会的、政治的、経済的、社会的、政治的、経済的、社会的、政治的、経済的、社会的、政治的、経済的、社会的、政治的、経済的、社会的、政治的、経済的、社会的、政治的、経済的、社会的、政治的、経済的、社会的、政治的、経済的、社会的、政治的、経済的、社会的、政治的、経済的、社会的、政治的、経済的、社会的、政治的、経済的、社会的、政治的、経済的、社会的、政治的、経済的、社会的、政治的、経済的、社会的、政治的、経済的、社会的、政治的、経済的、社会的、政治的、経済的、社会的、政治的、経済的、社会的、政治的、経済的、社会的、政治的、経済的、社会的、政治的、経済的、社会的、政治的、経済的、社会的、政治的、経済的、社会的、政治的、経済的、社会的、政治的、経済的、社会的、政治的、経済的、社会的、政治的、経済的、社会的、政治的、経済的、社会的、政治的、経済的、社会的、政治的、経済的、社会的、政治的、経済的、社会的、政治的、経済的、社会の世界で理解されている。これら的事例は、いわば学問や芸術においての国家レベルの充実感の追求につながっていった事例を示している。
著者の「討論する公共空間」の形成からナショナリズムへと至る、三つの対抗する、しかも絡み合っている回路を以下のように描き出した。それにそのたびだてではなく、著者はある種の価値的なコミットメントをその分析の中に持ち込んでいる。そのことがよくわかるのは、水戸学の「体性論」（第二編第七章と「津田真道の初期思想」（第二編第一〇章）の二つの章である。

まず後期水戸学、特に会沢正志著について、その「体性論」と「津田真道の初期思想」としての関係を示すものである。各々が「律儀なもの」を学ぶことを憂い、西洋社会を「利」を争う「禽獸」的社会として軽蔑することに動機づけられている点で

「国体」を社会と通じるものであることが指摘される。しかし、国学とも通じるものであることが指摘される。しかし、会沢の「体性論」は、天皇の国家観を用いて、本質を具体的に作る階層秩序を再建することが日本の

「国体」本来の姿に戻ることであると信じ込ませ、その秩序に対する受動的従従ではなく、能動的参加を促す政治的構築として機能することを期待する思想である。著者はこのような分析の後に、「近代日本の文法から生まれた矛盾にたいするひとつの対応の形を提示した点で、水戸学の「体性論」は歴史的な意義を有している」（二四頁、と述べている。そこで著者の述べるように、津田真道について、その西洋留学前後の思想、「国体」への焦りと具体的な社会関係を超える価値として理想化された天皇への忠誠心など、幕末期精神状態の典型例を示すものであることが明らかにされ、それが明治期の啓蒙的知識人としての活動においては、国民国家確立への献身という具体的で現実的な志向へと変容したことが指摘される。著者はここに
漢字を含む自然なテキストをここに表示することができません。